The Pacific Society

トラックの森ファミリー(1)
——その百年の足跡——

高知新聞東京支社　森沢孝道

昭和五十八年三月三十日から六月二十三日まで、六十回にわたって高知新聞に連載された『赤道に生きる』は、その副題「森ファミリーの百年」が示すように、森小弁の生い立ちから森一族の今日までを詳細に描写したもので、ミクロネシア史の資料としても貴重なものであった。

そこで、その後、太平洋学会に入会された著者にお願いし、その大部分を二回に分けて太平洋学会誌に転載させていただくことになった。

〈太平洋学会事務局〉

トラック諸島は、中部太平洋のミクロネシア連邦に属する。日本のはるか南方、赤道の北に浮かぶ島々の政財界の中枢を占めるのは日系の森ファミリーである。構成員は千人を超すといわれ、日系の一族が海外でこれほど隆盛しているのは珍しい。

ファミリーの始祖は、百年余り前に移り住んだたった一人の青年である。名を森小弁という。戦前の人気漫画「冒険ダン吉」のモデルともいわれている。この人物が高知出身だった関係で、私は余り知られることのなかった小弁の波乱の人生を明らかにするとともに、子孫の発展の経過、現況を追った。

その結果は「赤道に生きる—森ファミリーの百年」と題し、高知新聞で昭和五十八年三月三十日から六月二十三日まで六十回連載された。本誌に二回に分け転載するに際しては、一部を割愛し、最小限の訂正をした。また年代、年齢は新聞連載時のものをそのまま使用したことをお断りしておく。

〈森沢孝道〉

第一部　巨大な人脈

家系

森ファミリーはトラック最大の家系である。森小弁に続いて幾人かの日本人が渡来し、住みついたが、殺されたり、帰国したりで、大半の家系は途絶えた。現地系ではアイロン、カプアといった有力家系があるが、トラックでは森一族ほど大きくはない。

小弁はトラックのモエン島(旧春島)イライス村の酋長の娘、イサベルと結婚。一八九九年(明治三十二年)に第一子の長女(おさめ)が誕生、その後、太郎、二郎、小夜子、三郎、恵良子、梢、四郎、十四五子(とよいこ)、五郎、六郎の六男五女をもうけた。

その子供、つまり小弁の孫の数がまた多い。長老格の三郎さん(七二)、四郎さん(六三)の助けを借りて計算するが、『とても全部は覚えきれませんよ』と三郎さんたちも途中で何度か思案投げ首。三十分ほどかかりやっと六郎さんの孫まで計算が行きついた。結果は上から順に五人、六人、五人、七人、三人、三人、十一人、十五人、八人、六人、十五人の計八十四人だった。

現在は六世まで下がっており、とても全部は数え切れない。最近、ファミリーの一人が一族七百人まで数えたところで音を上げたという。『父系の直系だけで千人、母系家族のトラック式だと数千人に達する』(三郎さん)とのことだった。子孫にはイギリス、フ

NII-Electronic Library Service

The Pacific Society

ランス、アメリカ、中国の血も混ざり、一族は国際ファミリーになっている。

長女、太郎、二郎さんの三人が他界したほかは小弁の子供たちは健在で、各界で活躍中である。

太郎の長男、正隆さん（六〇）はトラック随一の貿易・小売業『トラック・トレーディング・カンパニー』（TTC）の社長、三男のロバートさん（三五）はトラック州副知事、正隆さんの長男、隆正さん（二九）はコプラ（ヤシの実の胚乳を乾燥したもの）輸出商社『トラック・トランスポーテーション』の総支配人でトラック商工会長。二郎の二男・可孝さんはトラック州議会議員、四郎さんはTTC重役、六郎さんはトラック病院営繕局長。

また二郎の長女ユリエさんの夫、相沢進さん（五三）はトル島（旧水曜島）酋長で『ススムズ・ストア』を経営。ミクロネシア連邦の中山大統領は、母親がイサベルの弟の孫娘という関係だったが、長女のローズマリーさん（二二）が昨年、正隆さんの二男、正義さん（二七）と結婚、名実ともに森ファミリーの有力メンバーになった。このほか高校教師、牧師、州政府の幹部など列挙できないほど多数だ。

ミクロネシア連邦の人口は八万人で、トラック州は四万人。日本でいえば、ちょっとした都市の有力家系程度といった見方もできるだろう。だが、わずか百年足らずの間に、大樹のような人脈ができた。それも土佐人の一粒種から派生したかと思うと壮観というほかはない。

竜馬と一豊

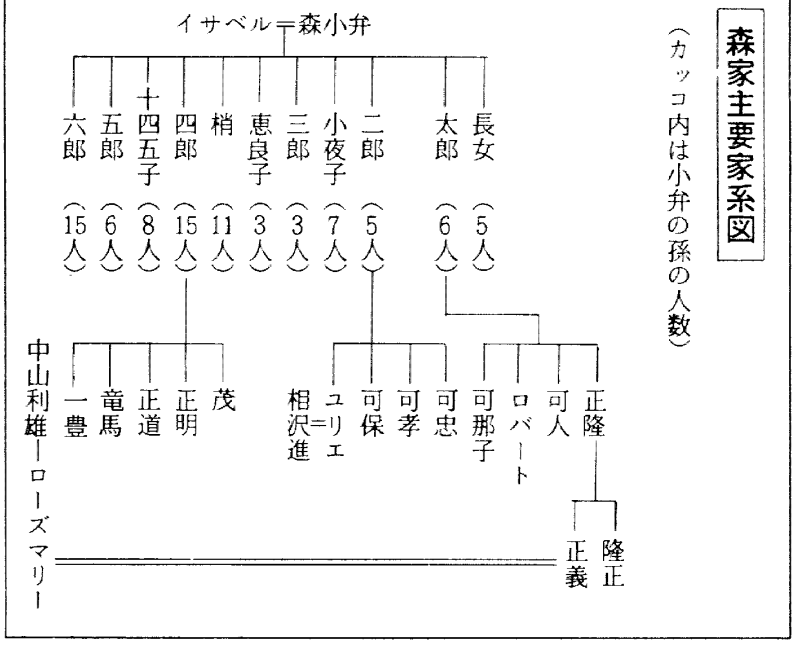
森ファミリーの三世以下の男子名を調べると、『可』と『正』の付くのが圧倒的に多い。

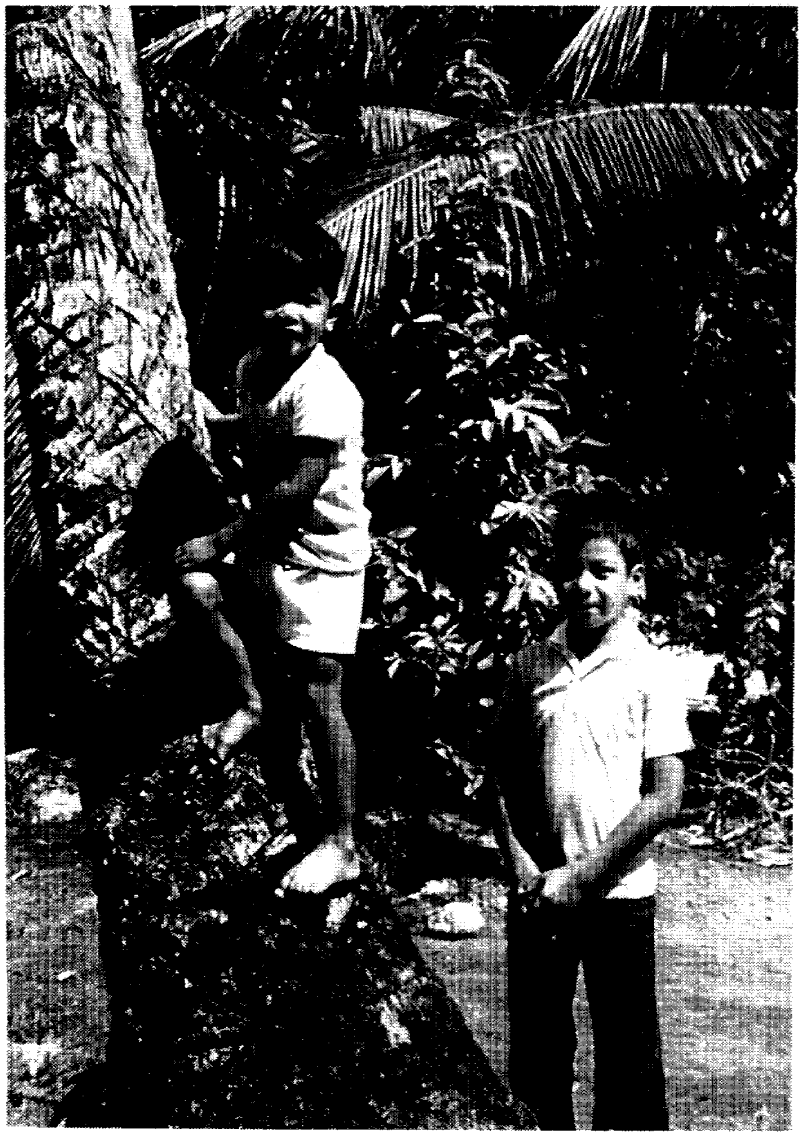
太郎さんの男の子は上から順に正隆、可人（よしんど）、二郎さんの子は可忠、可孝、可保。最も徹底しているのは四郎さんで十男中七人に正明、正臣、正年、正広、正友、正志、正道と名付けている。

『可』は森小弁の父、可造から取ったものだが、『正』は何に由来するのか。正隆さんの説明によると小弁は正隆という諱（いみな）、つまり別称を

森家主要家系図

（カッコ内は小弁の孫の人数）

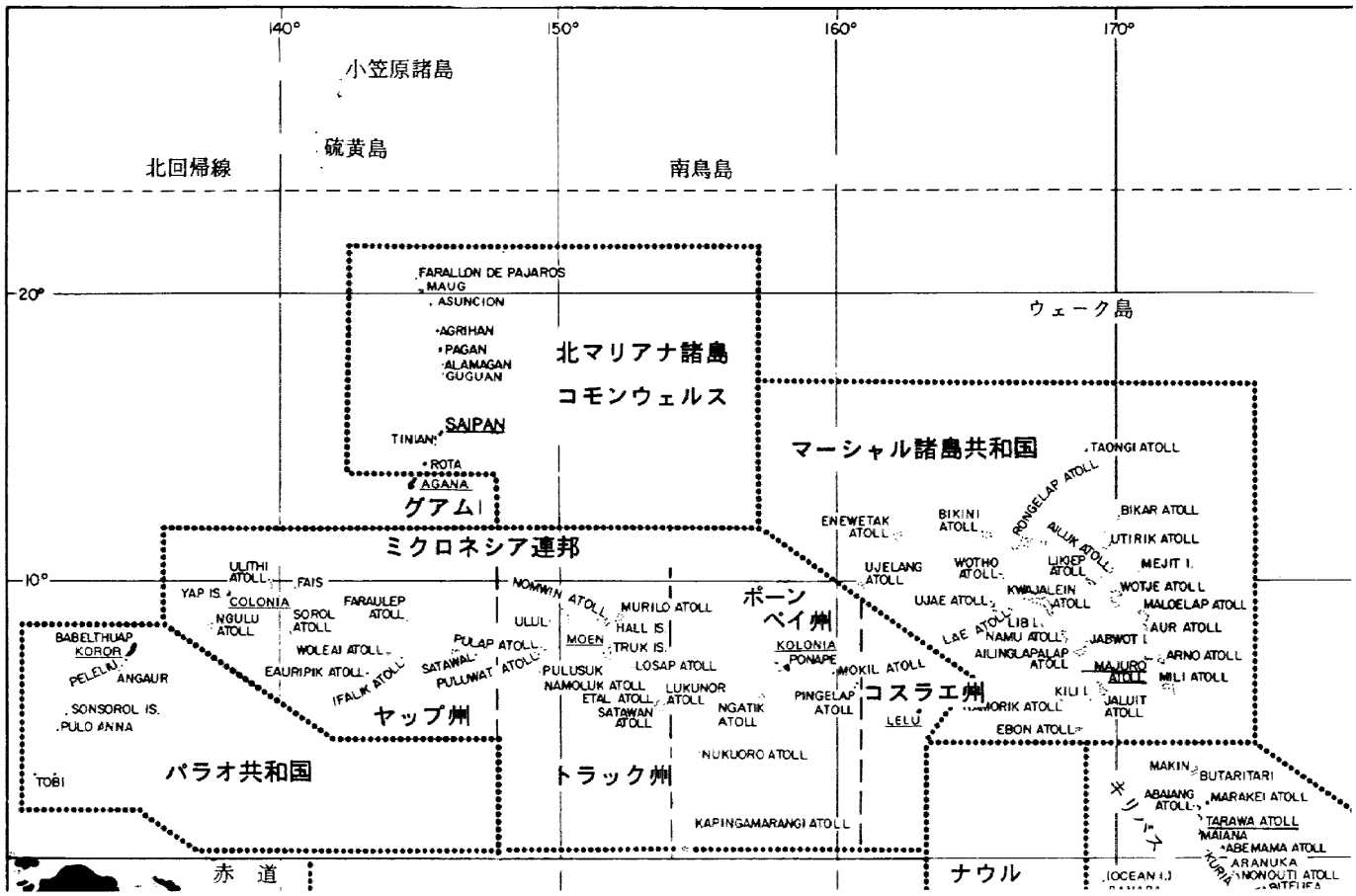




ヤシの木に登る森一豊ちゃん（左）と竜馬君。

NII-Electronic Library Service

The Pacific Society



持っていた。源九郎義経、天草四郎時貞のたぐいである。

小弁が簡単に子供に命名したのと対照的に、日本を遠く離れ、年代も隔たった子孫たちは、律義なまでに祖先の名前を踏襲している。この気持ちを正隆さんは、

『われわれはミクロネシア連邦の住民だが、日本人の血を引いている。日本人である誇りと自覚を子供たちに持ってほしいんです』

さらに土佐人意識を強く持ち合わせているのは四郎さん。十男中七人の名前は前述の通りだが、残る三人は茂、竜馬（一一）と一豊（五）。いうまでもなく吉田茂、坂本竜馬、山内一豊にちなんだものである。『私は今でも高知の人間という意識を持っています』と胸を張ったあと、『現に本籍は高知市仁井田一七一八番地（中屋一郎方）にあるんです』と付け加えた。

トラックに在住しながら、本籍が日本にあるのは意外である。

少しわき道にそれるが調べてみると、戦前の日本統治時代、トラックの日系人は日本国籍を有した。戦後はアメリカ支配に移ったが、ミクロネシア連邦は信託統治領で独立国家ではない。

日本国籍法第八条は国籍の喪失について、『日本国民は、自己の志望によって外国の国籍を収得したときは、日本の国籍を失う』と規定している。だが、戦前生まれの子孫たちは新たな国籍は取得しておらず、『極めて珍しい例で、国籍があるともないとも言えない』（法務省）。国籍不明のまま、本籍だけ元通りという変則状態になっている。

国籍、本籍問題はともかく、日本人意識を強く持っているのは日本語を話せる戦前、戦中世代までで、アメリカ式教育を受けた戦後世代は意識も変化し、それは名前の上にも表れる。

茂さん（二八）は、『自分の名前が高知の人にちなんだとは聞いていたが、大政治家とは知らなかった』と驚いた様子。『でもシゲルは発音しにくいとよく仲間に言われましてね』と日本名が不便な場合があるのを身をもって感じている。自分の三男二女にはメリー、スコット、スターナー、アルベル、ブラッドリーと全部、洋風な名前をつけた。

四人の実力者①

太郎の長男、正隆さん（六〇）は、日本流に言えばトラック森家三代目の当主である。

日本人の血は四分の一にすぎないが、顔立ち、肌色は日本人と変わらない。日本語も達者、というより日本人そのものである。それほどこの人の半生は、祖父小弁の母国と断ち難く結びついている。

日本統治時代の一九二三年（大正十二年）トラックで生まれた。育ったの

NII-Electronic Library Service

The Pacific Society

モエン島の『トラック・トレーディング・カンパニー（TTC）』前で、森正隆さん。

も現地だが、日本の統治だから小学校も日本語教育。親類の商店で、でっち奉公しているうちに第二次大戦がぼっ発した。父親に『立派な日本兵士になれ』と励まされ、徴兵検査を受けるため東京の土を踏む。

『検査にパスしないことには日本軍に入れませんからね。おやじは自分が軍隊に入れなかったから、夢を息子に託したんでしょう』

が、近視と乱視のため第二乙種の判定。入隊基準に達せず、親子二代志した日本兵になれなかった。

東京の機械会社に入社。しばらく働いているうち、祖父の小弁が病床に伏したとの報に接し帰郷することになった。

『ところが統治領の住民に対する出国審査が厳しい。理由を説明したけれど、二、三回だめでした。悲しかったです』

昭和十八年十月、やっと出国。しかし乗船した日本郵船『山城丸』が、小笠原諸島の沖合に差しかかった時、『ドーン』と大音響が起こった。魚雷をまともに受けたのだ。船体は大きく傾き、沈没。正隆さんは他の乗客とともに辛うじていかだで脱出した。

漂流。目を凝らし救助船を待ち続けたが、なかなか来ない。『きっと来る』との希望が、『もうだめだ』の絶望に変わろうとした夕暮れ、やっと船影を見た。

トラックに帰島後、昭和十九年三月に現地召集。終戦まで冬島で兵役につき、祖父の死に目には会えなかった。

戦後、アメリカ統治に変わっても、不思議と日本との関係は切れなかった。

父親が、モエン島の焼け跡に、戦後初の商店『トラック・トレーディング・カンパニー（TTC）』を開業。正隆さんもやがて入社する。店といってもカマボコ型のトタン屋根で、倉庫同然だったという。

商売が軌道に乗り始めたのは一九五〇年代。復興なった日本からの商品を輸入したのがきっかけだった。

『衣料品からミシン、ラジオまで、安くて品質のいい日本製品はよく売れた。これらの商品輸入を通じて、TTCはトラックに文化を紹介する窓口にもなったわけです』

◇

正隆さんには、所在を探している人がいた。東京時代に下宿した親せきの中尾さん一家である。和歌山県に引っ越したため住所が分からなくなっていた。和歌山の船舶がトラックに寄港すると、出向いては問い合わせたという。この中尾昇さんは現在歯科医で和歌山県海南市日方に住んでいる。住所、消息を伝えると、『そうですか。懐かしい。会いたい』と正隆さんは涙ぐんだ。

情にもろい性格も、日本人と変わらない。

NII-Electronic Library Service

The Pacific Society

四人の実力者 ②

トラック州副知事のロバート森さんは三十五歳。森ファミリー戦後世代の若き旗手である。

太郎の三男で、正隆さん（六〇）の末弟。兄弟といっても親子ほどの年齢差。しかも長兄は戦前の日本統治時代、一方は戦後のアメリカ統治時代に生まれ育ったとあって、何かと好対照である。

アメリカ式教育を受け、大学もグアム大学。日本語は『コンニチハ』『アリガトウ』といった簡単なあいさつ以外は全くしゃべれない。

おかしなことに〝森小弁〟という日本語名を持っているので、漢字で書いてみせると、『この字がコベン？　うーん絵みたいだ』と面くらった様子。ロバートの愛称ボブをカタカナでなぞってもらうと、へんてこな筆順でともかく書き上げ、苦笑した。

副知事に初当選したのは昨年の春。選挙は六人も立候補する乱戦となり、一回目はだれも当選に必要な四五％以上の得票に達しなかった。上位二人の決選投票にもつれ込み、わずかの票差で勝利を収めた。

当時三十四歳。『若すぎる』『当選できたのは、巨大なファミリーの背景があるからだ』といった批判、やっかみも根強くあるが、そうした声に行動でこたえるべく奮戦中である。

『日本では五、六十歳代にならないと知事になれない』と水を向けると、浅黒い精かんな顔を引き締めて、

『政治がお年寄りに独占されるのはよくない。若者が頑張らないと』

ときっぱり。

『ボートを操縦するように、この州を動かしたい』

と意欲的だ。

彼の政治目的の最大の柱は経済的自立である。パンの実、バナナ、タロイモといった自然の恵み以外に、トラック人が自らの手で作り出す物は何もない。すべて輸入品だ。

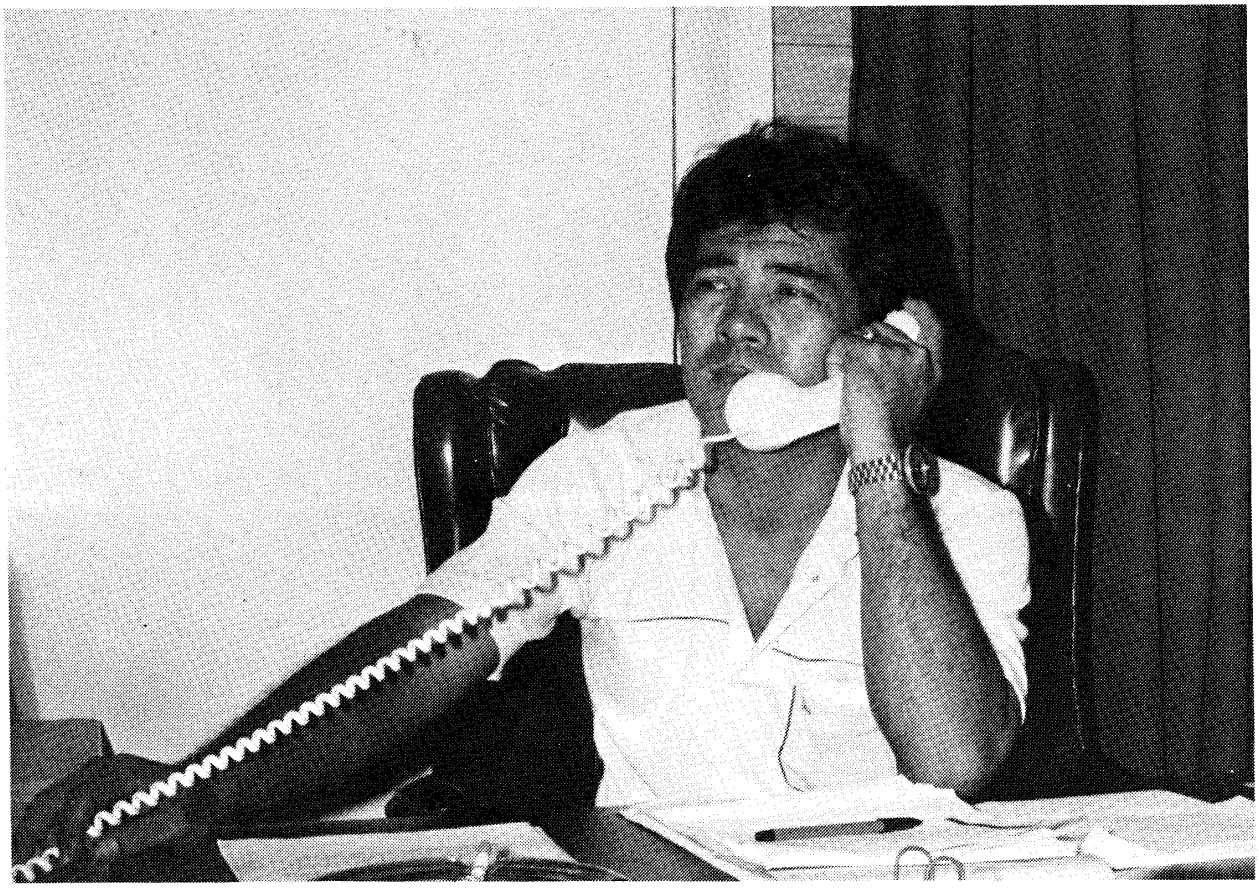
『野菜の栽培、魚の貯蔵庫や自動車の修理工場の建設など、やるべきことはいっぱいある』

そのためにも日本の経済、技術援助がほしいと訴えるが、同時に、『やってほしくないこともある』とも言う。核廃棄物の海洋投棄である。

五年前、日本は核廃棄物をミクロネシア近海に捨てる計画を立て、現地説明に出向いた。

『海洋投棄の安全性を説明されたが、われわれは猛反対した。若者もプラカードを持って抗議デモをしました。当然でしょう。安全なら日本近海に捨てればいい』

ミクロネシア連邦には米軍基地がない。第二次大戦の戦場となった悲劇を繰り返すまいとの信念がある。基地を誘致すればお金が入り、経済発展につながるので



精力的に動くロバート森さん（州政府の副知事室で）

NII-Electronic Library Service

The Pacific Society

服装も半そでシャツと飾り気のない中山大統領（トラック州政府知事室で）

は、と問いただすと、『ウイー・ウォント・ピース（われわれは平和がほしい）』

戦争体験が風化する中、平和を願う心は、南の島の若きリーダーの胸にしっかり刻み込まれている。

四人の実力者③

『――われわれは戦争を知ったがゆえに平和を、分断されたからこそ統一を、支配されたがゆえに自由を希求する』

一九七九年五月に施行されたミクロネシア連邦の憲法は、前文で平和と統一と自由を高らかにうたう。しかし南海の楽園というイメージとは裏腹に、連邦を取り巻く政治、軍事情勢は厳しい。

ミクロネシア連邦は、アメリカを施政権国とする国連信託統治領だが、同時に安保理事会管轄の戦略信託統治地区になっている。統治権を持つアメリカは、拒否権を盾にかなりの部分まで支配できる仕組みだ。その厳しい制約下、独立と平和のため、ぎりぎりの政治選択をし〝トラックのケネディ〟と称せられるのが中山利雄大統領（五二）である。

父親の中山正己さんは、森小弁に続き、大正時代にトラックに来た人。つまり大統領は日系二世であるわけだが、『父は日本人でも私はミクロネシア人』と言い切る誇り高き民族主義者である。

初代大統領に就任しても、物静かで控えめな人柄は変わらず、住民の信頼は厚い。大統領になるには、まずミクロネシア連邦を形成するポナペ、トラック、ヤップ、コスラエの四州から各一人、連邦議会全国区議員を選挙で選び、その四人の互選で大統領が決まる。中山さんはトラック選出だが、この第一段階の連邦議員選挙も大統領選も、ともに対抗馬は出ない。三月八日の議員選挙も無投票当選だったし、五月に大統領に再選されるのは確実だ。

連邦の政策は、憲法前文の通り平和主義に徹している。米軍基地はなく、核兵器の持ち込みも認めていない。この方針について、

『アメリカは世界戦略上、ここに基地がほしいだろうが、現在のところわれわれはノーと断っている。核兵器も、別に憲法で禁じてないが、政策上認めてない。理由？　われわれにとっては必要ないからです』

非核憲法を持つパラオ共和国は別として、米軍基地のある北マリアナ・コモンウェルス、ミサイル基地のクワジェリン環礁のあるマーシャル諸島共和国とは全く異なる政策である。住民は、『ナカヤマはアメリカの言いなりにならない。何が自国の利益か真剣に考えている』と信頼を寄せている。

世界にただ一つ残った信託統治領から脱却する布石は、現在進めているアメリカとの自由連合協定締結だ。外交、軍事はアメリカと共同歩調をとる傍ら、内政上は独立国という過渡期的な国家

NII-Electronic Library Service

The Pacific Society

形態だが、『統治領よりはマッチ・ベター（ずっといい）』と語気を強めて語った。

ことしの住民投票で、自由連合への支持が得られれば、この関係を十五年間続けた後に、悲願の独立、というのが大統領の描く青写真だ。『そのためにも経済基盤を確立しないと…』と自分に言い聞かせるように話を締めくくった。

大統領との会見場所は、ポナペの大統領府でなく、トラックの知事室であった。ソファに座っての会見だったので、背後の壁に大きな世界地図のある知事の机に、と勧めたら、『私の机じゃないので勘弁してほしい』と固辞した。

大衆性を失わないステーツマン（政治家）である。

四人の実力者④

『中山大統領なんて、おれの舎弟みたいなもんだ』とべらんめえ調でまくしたてるのは、トル島（旧水曜島）酋長で、トラック酋長会議議長の相沢進さん（五三）だ。一歳下の大統領とは幼なじみの親しい間柄がこう言わしめるのだが、一八〇センチ、八五キロの堂堂たる体格は、『トラックの首領（ドン）』という表現がぴったり。

初対面の時、握手したが、その腕の太いこと、握り返す力の強いこと。そのはずで相沢さんは、元日本プロ野球投手なのである。

トルに生まれ、戦後、父の庄太郎さんとともに神奈川県辻堂の実家へ。湘南中に通学。『佐々木信也（野球解説者）や衆木資宏（元阪急）は後輩なんだよ』と懐かしがった。

中卒後、東京の倉庫会社に入社。軟式野球の全国大会で優勝すると、その剛腕がスカウトの目にとまり、昭和二十七年、高橋ユニオンズ（のち大毎、ロッテ）に入団した。

南洋出身の異色選手と話題になったが、現役三年間の通算成績は八勝十七敗。短い期間でも、鮮明に記憶に残る試合が二つある。

『一番うれしかったのは甲子園球場での初登板。思い出になるのは、スタルヒンが三百勝を達成した記念すべき試合に先発したことだな。うんとしめていけ、とベンチの声援を受け、五回三分の二まで投げた。六対一で勝ってましたよ』

引退し、トル島に帰った。豪傑肌の相沢さんに、思わぬ試練が待ち受けていた。

『長い日本統治、日本の生活で、トラック語を話せなかった。地元の人間として扱ってもらえず、〝あれはよそ者〟と陰口をたたかれるのがつらかったなあ』

市民権も五年間取れなかった。トラック人がトラック人として認められない運命の皮肉。公職にもつけないので、ヤシの実の採集などで辛うじて生計を立てた。

トラック人になり切るよう努めた。現地語を覚え、習慣を身につけて、代わりに元プロ野球選手の誇りは忘れてしまうことだった。

やがて、『日本人とトラック人がけんかすれば、迷うことなくトラック人に味方できる』と確信できるようになったが、ある時、思いがけずトル島酋長にならないかとの話。『若いので柄じゃない』と一度は断ったが、今度は周囲が勘弁しなかった。

酋長職はいまだにトラック社会では厳として存在する。昔は世襲制だったが、現在はほとんど選挙制。政府の政策、方針を住民に周知さすほか、土地のごたごた、離婚話などあらゆる相談を受ける。日本で言えば、町内会長、民生委員、調停委員の役目を兼務する。

ところが、相沢酋長が常にも増して獅子奮迅（ししふんじん）の働きをする騒動が起こった。一九八二年八月発生したコレラの大流行である。

◇

外国から持ち込まれたコレラは、一九八二年八月トラックの離島で発生。瞬く間に全島に広がり、翌年三月末までに人口四万人のうち実に四、五千人が感染した。患者は次々にボートで、モエン島唯一の総合病院に運び込まれたが、船中や入院先で死んでしまう人もいた。死者の正確な数は分からないが、約二十人といわれている。

風土病のない土地だけに、島の生活はパニック状態になった。一部を除く学校は、コレラ発生の翌月からずっと全面閉鎖され、舗装と同時に進んでいた下水道工事もストップ。一時はトラック空港の閉鎖が真剣に検討された。

患者が発生した集落は、警察官が出て通行を規制した。が、病気に対する知識のない患者の中には、包囲網をくぐって出歩く者もいて、伝染を広げた。恐怖のあまり、子供を三カ月も家に閉じ込めた親もいたという。

世界保健機構（WHO）やアメリカ政府と連携し、防疫体制を整え、島内の衛生設備を改善しているが、それはもちろん連邦、州政府の仕事である。しかしその先の、住民に衛生思想を普及し、個々の施設改善をする段階になると、これは酋長に負うところが大きい。

相沢進酋長が特に力を入れたのは衛生思想の普及である。

『トラックにはシャモアといって、食事を一緒にとる習慣がある。一緒といっても家族だけじゃなく、親せき、近所から通りがかりの人まで加わる。この中に患者がいるとコレラ菌がまき散らされるわけで、「今はシャモアをやめなさい」と言って回る。それと食事

NII-Electronic Library Service

The Pacific Society

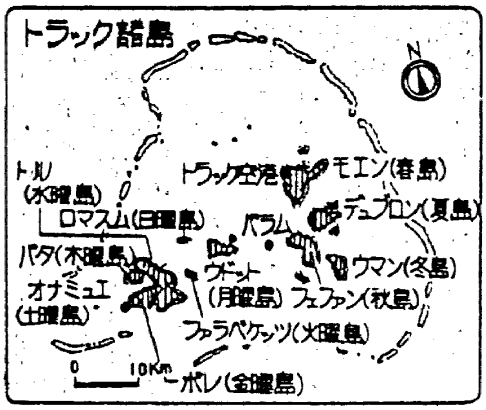
前の手洗い。当たり前のことを徹底するのに意外と骨が折れる』

名物の水上トイレの使用禁止も急を要した。たれ流した海で子供たちが泳ぎ、コレラ菌で汚染された魚介類を食べる。これがコレラ大流行の元凶である。

トラック酋長会議では、便所の改善を徹底するよう繰り返し指示した。

各島の巡回指導もする。今週はシチョウ・アイランズ、次週はシキ・アイランズというように多忙だった。一般住民以外にも、学校の先生が指導対象になることもある。はだしで通学する先生がいるのが現状で、非衛生的だから靴に、といったことまでやらなければならない。

このほか、水道に混入する殺菌用サラシ粉を大量に買い、予算不足の州政府に寄贈もした。個人経営の『ススムズ・ストア』や海運業から得た利益を回したもので、『利益は故郷の発展に還元する』信条の一つの具現でもあった。モエンにある彼の別宅を見たが、一般と同じ質素なものだった。



コレラ禍はやっと鎮静化したが、相沢さんの尽力を忘れることはできない。『酋長の報酬は月十ドル。あわないよ』とこぼしながらも、そのいかつい顔には『おれがいなくては』と書いてあった。

教育熱心

トラック人になりきったこと、努力したこと、森一族が今日の地位を築いた要因は幾つか挙げられるが、見逃せないのは教育水準の高さである。教育熱心なのは森家の伝統。もっと大きな視点から言えば、日本人の伝統を受け継いでいるとも言えよう。

小弁の長男の太郎、二男の二郎の履歴書には次の個所がある。

太郎　明治三十七年一月六日生まれ。大正四年三月、ヤルート島ドイツカトリック学校卒業、同年五月、東京府下鮫浜尋常小学校（現品川区）入学、八年三月同小卒業、四月高輪中（同）入学、二年生の時病気のため帰島。

二郎　明治三十九年八月八日生まれ。大正二年十月、ヤルート島カトリック学校に入学。四年四月、家事のため退学。同年五月、鮫浜尋常小学校に入学、九年三月同小を卒業し帰島。

現在マーシャル諸島共和国に属するヤルート島は、トラック諸島から東へ二千キロ、日本からは三千五百キロも離れている。当時トラックには施設の整った学校がなかったため、小弁は子供によりよい教育を受けさすため、〝海外留学〟させたのだ。

小弁はまた、しつけにも厳しかった。三郎さんは、『おやじは武士道精神の持ち主で、礼儀作法にうるさかった。家の中では日常のあいさつを欠かせなかった』と、また正隆さんは、『孫と言って甘やかすことはなかった。子供時分にはやったビリヤードは禁止で、かけごとなどもってのほか。私なぞ日本に行くまで遊びを全然知らなかった』と述懐する。

二郎から下の子供は、戦争もあって、トラックの学校に通った。

が、三世以下になるとまた海外留学が復活。その数も大変なものである。

三郎さんの長男、正幸さん（三七）はハワイ大大学院卒。四郎さんの長男、茂さん（二八）はオレゴン大、長女、マクタレーナさん（二六）はグアム大、二女グローリアさん（二五）もオレゴン大で学んだ。四男、正年さん（一八）も地元の高校を卒業し、アメリカ留学の準備をしている。

正隆さんも教育熱心さでは負けない。長女、ロサリンダさん（三〇）はカリフォルニア大、長男、隆正さん（二九）はシカゴの高校を経てハワイ大、三女のダリーンさん（二二）は徳島の四国女子大に二年間留学したのち、現在はハワイ大で学業を続けている。

トラックに大学がないことにもよるが、相当な留学熱だ。奨学金制度があっても、親の出費はかなりの額である。『本当に頭が痛いですよ』（四郎さん）とやりくりに苦労するのは日本の親と同じである。

トラックの学生で、大学まで進学するのは推定二、三％。一族の進学率は群を抜いており、この教育水準を保つ限り、ファミリーの地位は揺るぎそうにない。

小弁記念碑

デュブロン島（旧夏島）の東部、トラック公園の近くに、森小弁の記念碑があった。パンの大木の間にあり、高さ三・五メートルの立派なもの。

古びた石碑には、

『杜落（トラック）開拓者森小弁翁ハ土佐ノ人ニシテ　夙（つと）ニ雄志ヲ南洋ニ馳セ　明治二十五年単身渡航爾来五十有余年島民ヲ教化シ　進ンデ指導…』

と刻まれ、最後に、『紀元二千六百年四月二十九日　南洋支庁長　依光重親』とあった。昭和十五年のことで、尊王の念厚い小弁に合わせたのであろう。この日は当時の天長節である。

NII-Electronic Library Service

The Pacific Society

設置者の依光さん（八五）は現在、東京都練馬区春日町一―一一に住み、元気で老後を送っている。幡多郡大月町出身で、戦前の高知県選出代議士、依光好秋氏（故人）の実弟である。

旧拓務省に入省し、昭和十三年から十六年まで南洋支庁長を務めた。尊大な支庁長が多いなかで、依光さんは民生向上、産業発展に尽くし、今でも『シゲチカ』の名は、名支庁長として残り、住民の深い敬愛を受けている。

依光さんは夏島に着任早々、小弁と会った。赴任式の会場に、水曜島にいた小弁が、わざわざ駆けつけたのである。その日のことを、依光さんは今でもはっきり記憶している。

『蒸気船でやって来て、私も土佐の生まれですと真っ先にあいさつされました。私が高知出身というので大変喜んでいました。

小弁は、白い探検帽、義手の左手には白い手袋という、いつもの格好だった。体の不自由をおして会いに来てくれたことに依光さんは感激し、その後たびたび水曜島に出向くなど親交を結んだ。

依光さんは、着任前から小弁の名を知っていた。南洋開発の先駆者として、拓務省内では知らぬ人がないほどだったという。

小弁は権力者というより、トラック全体のまとめ役、世話人タイプだったようだ。

『私は日本の政策を住民に指示する立場にあったが、直接やると摩擦も生じる。小弁さんを通じ、酋長（しゅうちょう）に話をつけると、円滑に進みました。小弁さんの人望によるところが大きかった』

小弁はまた私費で学校を建設し、ヤシ栽培を指導するなど、碑文にうたう『島民ヲ教化シ進ンデ指導』する働きもした。

ミクロネシア連邦の中山利雄大統領も『私の父の中山正己や相沢進の父の相沢庄太郎は、小弁さんに続いてトラックに渡った。最初に渡来、定住し、島の発展に尽くした人生は偉大だった』とたたえる。

だが、小弁の業績は当時、一部で評価されたにすぎず、死後三十八年たった今日、その名前さえ忘れ去られようとしている。

第二部　小弁伝

出国

板垣退助らが愛国公党を結成し、民撰議院設立建白書を提出した明治七年から、大日本帝国憲法発布の明治二十二年までを自由民権時代と呼ぶ。土佐が幕末とともに最も高揚した時期で、自由民権運動の思想、実行の中心的役割を果たし、幾多の人材を輩出した。

明治二十三年十一月二十五日開会の第一回帝国議会は、その晴れ舞台であった。東京・日比谷の議事堂には、選良三百人が参集した。民権運動で活躍した高知県関係では、地元選出の竹内綱（吉田茂の実父）、片岡健吉、林有造、植木枝盛のほか、それぞれゆかりの県外選挙区から立候補した中島信行、中江兆民、大江卓もいた。大半の議員が人力車や馬車で乗りつけるなか、植木は悠然と歩いて登院。最後に現れたのが中江兆民だったという。

会議に先立つ主要ポストの選挙では、中島が衆院議長、大江が予算委員長にそれぞれ選ばれた。ひな壇の閣僚席には、山県有朋首相と並んで後藤象二郎逓信大臣の顔も見え、土佐人はアジア最初の議会で重きをなした。

十二月、審議が開始されると、旧自由党系議員は、薩長閥の専制政府に先制攻撃をかけた。明治二十四年度予算案八千三百三十万円に対し、『政費節減』『民力休養』を理由に、一割近い約八百万円の削減を要求したのである。これを突っぱねる政府側との攻防はし烈を極め、ついに越年した。

翌明治二十四年――それは民権運動、憲政史上にさん然と輝いた土佐の栄光が、大きく傾いた年だった。

三月、予算案は曲折の末、政府の意向に沿った六百五十万円の減額修正で可決された。政府案に強硬に反対していた立憲自由党、立憲改進党のうち、土佐派二十八人が一転、修正案に同調したのであった。いわゆる土佐派の裏切りである。

竹内綱、片岡健吉らが態度を変えた背景には、予算案修正に対する議会審議権の制約、最初の議会を丸く収めたいとの対外的メンツもあったが、土佐派切り崩しのため山県首相が大掛かりな買収工作をし、それが奏功したことが定説化している。

土佐人は憲政史の最初の一ページにぬぐい消すことのできない汚点を残した。そして山県首相の策謀の手先となったのは、この機会あると見越して閣内に取り込んだ後藤逓相と陸奥宗光農商務相であった。

中江兆民は議会を『無血虫の陳列場』と非難し辞職。七月には小樽の新聞社の主筆になるため北海道に旅立った。残った議員もかつての勢いはなかった。十二月、植木枝盛は議場で出版法案の提案理由を説明したが、死期は一カ月後に迫っていた…。

そんな十二月のある日、大型蒸気船の行き交う横浜港に一隻の小さな帆船が停泊していた。南洋貿易を始めたばかりのミニ商社『一屋商店』の『天祐丸』である。わずか九十一トン。社員二人と船員七人が乗り込んでいた。

NII-Electronic Library Service

The Pacific Society

社員のなかに、身の丈五尺四寸五分（約一六四センチ）、目の澄んだ細面の青年がいた。森小弁である。時に二十二歳。名刀『備前長船』一振りと短銃一丁を携えていた。

動機

迷懐

北極ノ南　南極ノ北　地勢雄濶　島国多シ　久シク懐ヲ遠交近攻ノ策
何処ニ向イテ吾ガ才ヲ展（ノ）ベント欲ス
太閤ノ雄図ハ徒（イタズラ）ニ民ヲ労ス
七郎ノ奇計ハ空シク人ニ倚（ヨリカカ）ル
功名別に必成ノ術有リ
路ニ当タリ何（イズクン）ゾ逡巡ヲ事トス
沖縄遥（ハルカ）ニ望ム濠洲ノ路
星羅点綴山無数
身ヲ殺ス素（モト）ヨリ分トス鯨鰐ノ腹
骨を埋ム豈（ア）ニ期セン旧墳墓

この漢詩は、森小弁が後年、明治二十四年の渡航時の心境を詠んだもので、昭和七年発行の『実業界の面影』に寄稿された。

前段は、朝鮮出兵と南方交易を図り挫折した豊臣秀吉と腹心の原田孫七郎に思いをはせたものである。小弁自身の意訳に従って文脈を見る。

――この南北太平洋には無数の島々があり、秀吉らは兵を起こしたが、名を空しくしたのは痛恨の至りである。遠交近攻の策略で、祖国の領土拡張をするにはどうすればよいのか。

後段は、故事を踏まえ、南太平洋を経略するのは自分の使命で、目的達成のためには他国に骨を埋める覚悟と決意が必要。

――南方、豪州に目を開け。沖縄のかなたにマリアナ、カロリン、ニューギニアなどの島々が、きら星のごとく散在するではないか。天公はこの版図を自分の取るに任せているではないか。大望を達成するためには、鯨やワニに食われ、また祖先と墓を異にするのも覚悟の上である。

気宇壮大な内容である。管理社会とやらに慣れた現代人には理解し難い部分もあるが、社会全体がアメーバ状に動いていた明治中期の日本では、決してとっぴな発想ではなかった。

長い鎖国を解き、幕末に開国した日本は、明治中期までに、やっと近代国家の基礎を築いた。身固めができると、欧米列強のアジア進出の刺激も手伝い、中国大陸、南洋への領土拡張の野心が頭をもたげ始めた。いわゆる北守南進論である。

正装した森小弁。昭和十月ごろ、水曜島の自宅前で（和歌山県海南市在住の中尾薫氏所蔵）

NII-Electronic Library Service

The Pacific Society

自由民権運動に身を投じ、時代の空気をたっぷり吸って生きていた小弁が、南進論に共鳴し、その先駆者たらんと志したのは自然といえば自然であった。『骨ヲ埋ム…』と述べているように、小弁の南洋に定住する決意は非常に固かった。一時の海外出張気分とか、一旗あげたら帰国するといった腰掛け的なものではなかった。実際、小弁はけがで一時帰国した以外は、南洋を離れず、そこに骨を埋めた。

これほどまでに固い決意をさせた真の理由は分からない。が、小弁は、昭和十三年からトラック支庁長を務めた依光重親さん（八五）＝幡多郡大月町出身、東京・練馬区在住＝に、『日本ではいろいろいやなことがあった』と動機の一端を語っている。

小弁に何があったのか。多感な青春の軌跡を追ってみる。

生い立ち

森小弁は明治二年十月十五日、土佐郡北新町三丁目一九番地（現在の高知市桜井町）で生まれた。父可造、母加奈の二男。加奈は高知城下の漢学者、熊沢甚平の二女で、姉の八賀は、森家の本籍、長岡郡三里村仁井田二一七番と同番地に住む中屋史易（なかや・ひさやす）と結婚した。この住所は現在の高知市仁井田一七一八番地、中屋一郎氏方である。

小弁は十人兄弟。上に静雄（のち正教）、仲、美代、松枝、下に直井、三郎、義喜、四郎、操がおり、小弁は五番目の子だった。

一族は武士で、明治二年の版籍奉還に伴い、士族となった。仁井田はいわゆるお城下ではなく、武士といっても上級ではなかったようだ。

仁井田は戦国時代から土佐水軍の中心地だった所。長宗我部氏は種崎に造船所を創設し、土佐藩二代藩主、山内忠義は、これをさらに拡張した大造船所『御船倉』を建設した。そして作業を監督するため船役人が配属された（三里小開校百年記念事業実行委員会『三里のことども』から）。

森家の本籍地から、御船倉までは西に四、五百メートルの距離。歩いて五分程度で、現在は近代設備の造船所のクレーンが望める。こうしたことから森家は代々船役人で、小弁が船で南洋に渡ったのはこの血筋を引いたのではなかったか、との見方もある。

小弁の人生を考えるうえで、軽視できないのは当時の社会構造。明治維新により、旧武士階級は生活基盤を根底から覆された。大半が失業し、路頭に迷った。仁井田に住んでいた可造が、小弁が生まれた明治二年、北新町に転居していたのも、この社会の激動と無関係ではないだろう。

新体制に不満を抱く士族の一部は、暴動に走ったり、自由民権運動に活路を見いだしたりした。政府は困窮した士族救済のため、士族授産制度を設け、内地開拓、さらには海外移住を奨励した。小弁がのちに自由民権運動に参加し、挫折後、南洋開発を志したのは、意識するとしないとにかかわらず、どこかでこうした社会の流れとつながっているはずだ。

小弁――少し変わった名前である。『新字源』（角川書店）で、『弁』の項を引いてみた。

弁は新字体で、旧は『辨』。一つの意味に『下級の武士』とあった。高知城外に住んだ森家の家格そのままである。

語源が興味深い。もともとの字体は『〈〈艸』。『両手でおおい（〈）をかぶるさまによって、冠の意を表す』とある。小弁は、トラックに渡航後、酋長の娘イサベルと結婚し、自らも酋長になった。冒険ダン吉がそうであったように、酋長の象徴は王冠である。小弁は南洋に渡り、酋長になる星の下に生まれていたのだろうか。

大阪と奈良

明治維新後しばらく、森家は生活苦に陥っていたが、父可造にやっと就職先が見つかった。高知市史編纂委員、吉村淑甫さんの調べによると、大阪府大属、今でいう府庁の役人がそれで、小弁を含む一家は明治四年末、大阪に転居した。

その後可造は、新しい国家機構の新設に伴ってできた裁判所の判事に登用される。

大阪市立図書館所蔵の『大坂裁判所職員録』（明治六年九月付）に次の記載がある。

権大解部　牧山矩▽中解部　戸原稙国　谷津春三▽権中解部　森可造　小松弘隆…

解部（ときべ）という官名は現存しないが、判事のような職制であったらしい。この時の可造の住所は、土佐堀二丁目（現在の大阪市西区土佐堀）とある。

土佐堀は、淀川の下流、土佐堀川に面し、地名は戦国時代、土佐商人が群居したのに由来する。江戸時代には、すぐ南に土佐藩の蔵屋敷が置かれ、明治八年には土佐立志社の前進基地ともいうべき愛国社の本部が創立された。また対岸の中之島は、大阪の政治経済の中心地の一つで、自由民権運動のころは各種の集会が開かれ、小弁の思想形成上、見落とすことのできない場所である。

やがて小弁は、就学年齢に達する。山本繁蔵トラック支庁長の書いた『森小弁翁小伝』（昭和十二年）によると、『明治八年（月日不詳）西六小学校に入学』とある。が、この記述は少し正確さを欠く。大阪市立諸学校変遷表によると、西六小は、立売、砂場、鰹座

NII-Electronic Library Service

The Pacific Society

の三小学校を統合し、明治十七年に発足しており、八年にこの校名は存しない。西六と記述したのは、一度帰郷したあと再上阪した小弁が新校名を知り、これを山本支庁長に伝えたためであろう。

十一年、可造は奈良裁判所長に栄転一家は奈良に引っ越した。『小弁は父母に従い奈良に赴き、中筋小学校に転校、傍ら佐々木漢学塾に入る』と同小伝に見える。

吉村さん提供の資料によると、住所は『大和国奈良中筋町十八番地寄留』とあり、中筋という地名は小弁の通った小学校名と一致する。渡航時の心境を詠んだ『述懐』など漢詩を作った素養は、このころ身につけたものであろう。

新しい社会に溶け込み、一家の生活は安定していた。小弁も恵まれた家庭、教育環境ですくすく育っていた。この生活が続いていたら、小弁の人生も全く別の形をとっていたのかもしれない。

だが、幸福は束の間だった。可造は病床に伏すようになり、十三年十月死亡。四十九歳だった。

大黒柱を失った一家は、再び苦しい生活に戻り、間もなく高知に帰った。小弁十一歳の時だった。

仁井田

大黒柱を失い故郷に帰った小弁が、腰を落ち着けたのは本籍の三里村仁井田（現在の高知市仁井田）であった。

小弁の戸籍謄本に『亡養父保助養子戸主　森小弁』とある。保助は可造の父親で、小弁は祖父の養子になった。これは嫡孫（ちゃくそん）と呼ばれる制度で、隠居した祖父に資産がある場合、孫が相続することがあった。長男の静雄でなく、二男の小弁が相続したことを、高知市史編纂委員の吉村淑甫さんは、『長男が既に独立していた時は、二男が継ぐこともあったが、小弁はこれに相当したのだろう』と説明する。

問題はこの養子入籍の時期だが、小弁の二番目の姉、松枝の孫、中尾可代子さん（大阪在住）は『可造が死んだあとと聞いている』と証言する。だとすれば、小弁は明治十四年以降、仁井田の旧二一七番屋敷に住んでいた保助の元に身を寄せたことになる。同番地の現在の戸主、中屋一郎さんも『小弁はここに住んだことがあった』と裏付けている。

小弁は高知市九反田にあった海南私塾分校に通学し始める。この塾は山内豊範が明治六年、軍人養成を主目的に東京に設立したもので、高知分校は三年後の創設。同十五年、本校を分校に併合し、海南学校に組織替えした。

小弁が軍人を志したかどうかは分からない。しかし後に朝鮮改革という自由民権運動の中でも過激な大阪事件に加担し、さらに刀と短銃を持って南方経略を企てた生き方は、軍人願望と一脈通じているようでもある。

当時は、自由民権の全盛期。国会開設の運動は盛り上がり、十四年に開設の詔が発せられた。同年自由党が、翌年には立憲改進党が相次いで結成され、立憲議会主義の準備は着々と進んだ。

全国各地に政治結社が結成された。もちろん自由党発祥の地、土佐とて例外ではない。『自由党史』（岩波文庫）には、『土佐の如きは、市となく、郡となく、到る所団結の簇生（そうせい）せざるなく、ことごとく立志社を中心として行動し、武を練り文を修むるの風、ますます盛んなり』とややオーバーに、当時の様子を描写する。

〈一つとせ、人の上には人はなき…という『民権数え歌』も流行し、この波は小弁のいた仁井田にも押し寄せた。『日本の歴史』（中公文庫）には『各社の社員は立志社に集合して翻訳の政経書を論読した。（中略）仁井田の浜などではしばしば旗奪いの競技が催され、数百人の青年がときの声をあげた』とある。

小弁を自由民権に向ける素地は徐々に醸成されていったが、小弁は十六年、海南学校を中退した。理由は分からない。

小弁は大阪裁判所に勤務していた兄正教を頼り、再度上阪した。この時の正教の住所は不明だが、小弁は思想形成に大きな影響を受けることになる長姉・仲の夫、芝亭実忠と出会う。芝亭とはいささか耳慣れない名字だが、そのはずで公家の血筋を引いていた。

義兄・芝亭実忠

小弁の長姉・仲の夫、芝亭（しばてい）実忠は公家の出である。芝亭家は幕末には既に落ちぶれ、いわゆる貧乏公家であったらしい。

幕末・維新を舞台にした井上ひさし氏のユーモア小説『おれたちと大砲』（文春文庫）に、実忠の父、裏辻公愛一家を描いた部分がある。裏辻は芝亭の本家で、三男の実忠は分家している。

〈『裏辻様は金払いが悪うて困る。うっとこやて、これまで何十遍、鮓（すし）代を踏み倒されたかしれへん。鮓と引き換えに金もろうてきとくなはれや。裏辻様は閑院家二十三家のうちの十三位で正四位下、お公卿はんとしては、まあ言うたら中の中や。ほやけど金払いの悪さ言うたら下の下の下…』

『そんなに金がないんですかね？』

『まあ、お内証はぴいぴい火の車やねえ』

（中略）

岡持ちふたつぶらさげて、おかみさんに教わったとおり宝町通まで行き東に折れた。三軒目に崩れた土塀にかこまれた邸があった。門柱に『裏辻公愛』と書いた小さな木札がさがっている。〉

京都の仕出し屋のおかみが、料金踏

NII-Electronic Library Service

The Pacific Society

み倒し常習犯の裏辻家を一刀両断にした場面である。これほどまであしざまに書かれては、と一部の子孫から名誉棄損で訴える動きもあったといういわくつきの場面だが、貧乏だったのは事実のようである。

公愛の孫、稲村加寿子さん（七五）＝東京都杉並区在住＝所有の実忠伝によると、裏辻家の宗族戸主は西園寺公望。実忠は安政六年（一八五九年）京都に生まれ、少年時代は奈良で仏教を修行。小弁と同じ佐々木漢学塾でも学んだ。

長じては明治十年小学校長、十二年、小弁の父、可造のいた大阪裁判所御用掛、十四年横浜裁判所判事補と順調なコースをたどるが、履歴書はここから一挙に二十六年愛知県津島神社出仕までとび、十二年間の空白がある。そして、『どういう経緯でか明治二十一年、自らの意志で華族の身分、位階を拝辞し、平民になったが不明』と稲村さんも首をかしげる。

実忠に何があったのか。

『自由民権運動をやって爵位をはく奪されたのではないでしょうか。子供三人をほったらかし、たいそう運動に打ち込んでいたらしいですよ』

昭和十年発行の雑誌『南洋群島』収録の『森小弁翁』（著者・横田武＝故人、中村市出身）に、『芝亭という人は、公卿の出であるが、非常に進歩主義で、板垣退助と相呼応して自由民権を高唱した』とある。

また高梨光司著『大阪の民権運動』という論文によると、政治演説会に対する当局の規制が厳しくなった明治十八年ごろから政治講談が流行し始めた。大阪に集まった数十人の講談師を列挙する中に、次のくだりがある。

『この中でも自由童子の川上音次郎などは殊に有名であったが、中には東京府華族の芝亭実忠などの変わった顔ぶれもあった』

このころはまだオッペケペェ節ははやっていなかったが、実忠は政治講談などの形で民権活動をしていたのである。

こんな空気の大阪に飛び込んだ小弁は、義兄、実忠と接触、感化される。前出の『森小弁翁』には『小弁が政治的な趣味を多分に持っていたのは、あながち土佐で育ったからというばかりでなく、この義兄の薫陶によるところもまた少なくなかった』と述べる。

こんなとき、とんでもない陰謀が持ち上がる。朝鮮を武力改革しようという大阪事件である。

大阪事件 ①

盛り上がった自由民権運動も、明治十六年ごろから屈折し始める。政治理念の未熟、運動方針を巡る内部対立、政府の取り締まり強化などいくつか要因はある。が、馬場辰猪らの反対を押し切り、三井財閥から出たと思われる資金で、明治十五年十一月から翌年六月まで洋行した板垣退助、後藤象二郎の行動は、明らかに運動に水をさした。

十七年十月、自由党解散。この前後から運動の一部は急進化し、加波山事件、秩父事件など、いわゆる激化事件が続発した。十八年の大阪事件は、こうした延長線上に起きた特異な事件である。

首謀者の大井憲太郎ら旧自由党急進派は、清の支配下にあった朝鮮の武力革命を計画した。その内容は決死隊二十数人が朝鮮に渡り、王朝を打倒、親日的な政権を樹立しようというものだった。

明治十八年九月、完成した爆弾を大阪に運んだが、資金不足のため出発できない。資金調達のため強奪など非常手段も講じたが、うまくいかなかった。渡朝隊長らの失そうもあり、一味が大阪に集まって協議中の十一月、陰謀が発覚し、一網打尽となって検挙されたので、大阪事件と呼ぶ。

検挙は翌十九年初めまで続き、検挙者は百三十人前後に達した。未遂事件のため犯罪の立件が難しく、取り調べ段階で釈放された者も多く、実際に起訴され、裁判記録に名前の残ったのは五十八人。高知県人では、資金調達に加担し逮捕された県会書記、波越四郎（土佐郡江ノ口村出身）の名前があるだけで、小弁は見当たらない。この辺の事情を森三郎さん（七三）は、『おやじからは、当時十六歳の未成年だったので釈放されたと聞いた』と証言する。

大井らのねらいは、まず朝鮮の専制政府を打倒、その余勢で日本の専制政府も打倒し、民主政府を樹立する二段革命にあった。当然この計画は、民主政治実現のための果敢な行動、いや侵略主義的で無謀なクーデター、と今日の歴史家の間でも評価は二分されている。

本来、民主主義を目指す民権活動家が、どうして他国に兵を起こす挙に出たのか。そこに至る経過をもう少し見てみよう。

大阪事件の引き金は、明治十七年十二月に起きた甲申事変にあると言われる。朝鮮の反王朝勢力が、日本政府と連携しながら企てたクーデターで、資金調達には旧自由党（十七年十月に解党）の大物、後藤象二郎がパイプ役を果たした。

クーデター部隊や日本軍はいったん王宮を占領したが、清国軍の攻撃を受け敗走、在留邦人が殺傷されるなどした。

事件が報じられると、国内世論はナショナリズム一色になった。一部の民権家も世論に同調し、『清を打倒せよ』『朝鮮に謝罪を求めよ』と叫んだ。

朝鮮派兵に向けた義勇兵募集が全国で行われた。民権の中心地だった土佐も例外ではなく、『自由党史』（岩波文

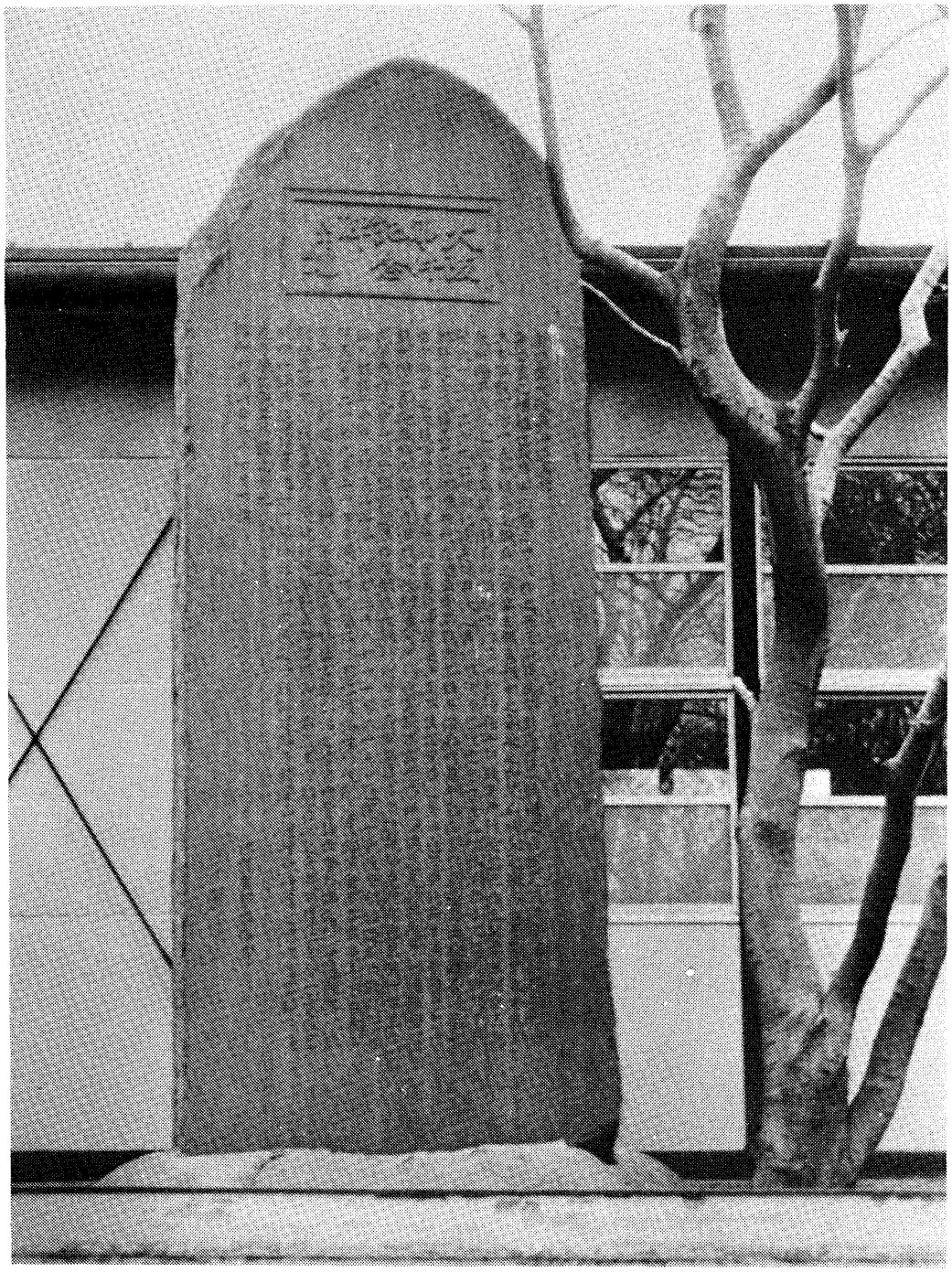
NII-Electronic Library Service

The Pacific Society

庫）は、当時の様子を次のように描写する。

『板垣、片岡の先進、全県の人心を董（とう）率し、各社各郡の有志を統べて義勇兵を編制し、昼夜操練に怠らず。一日全軍を帥（ひき）いて高岡仁淀磧に都講す。片岡健吉総指揮たり。士気頗（すこぶ）る振う』

こうした世論に乗じ、朝鮮、日本の二段革命を企図したのが大阪事件であった。他国の民主化を実現してやろうというのは大国の思い上がりで、本質的には自由民権思想と相いれないはずだが、若い小弁は大きな渦に巻き込まれていったようである。



横浜市鶴見区の総持寺に建つ大阪事件の記念碑

大阪事件 ②

小弁はどのような経緯で、どの程度、大阪事件に関与したのだろうか。

上阪したのは明治十六年。森三郎さん自筆の小弁履歴書に『明治十六年八月、大阪ニ出デ家事ノ手伝ス』とある。大阪にいたのは長兄の正教（静雄改め）。大阪高等裁判所保管の履歴書によると、正教は明治十三年十二月から十八年一月まで大阪上等裁判所（旧称）に在勤している。

十六年当時、大阪事件を起こす不穏な動きが既にあった。朝鮮の王朝政権打倒をもくろむ朝鮮独立党員の潜行活動である。高知県会書記で、のち同事件で逮捕された波越四郎は公判で、参加動機を次のように供述している。

『十六年ごろ来阪せし際、朝鮮の独立党なる呉鍋封、池連永等に会し、同国の独立を図るため、両氏とともに朝鮮において新聞紙を発行し、以て人民の志気を鼓舞せんと欲した』

小弁が波越や独立党員と接触したかは不明だが、雑誌『南洋群島』（昭和十年）掲載の小伝『森小弁翁』に、『兄の正教が大阪上等裁判所の書記をしていたのを頼って上阪し、間もなく韓国政府転覆の陰謀家、大井憲太郎に師事した』とある。筆者の横田武（中村市出身）は、執筆当時、同誌の主幹で、トラック諸島の小弁に面接取材したもので、記事の信頼度は高い。

同小伝は、小弁と大阪事件とのかかわりを、次のように記している。

NII-Electronic Library Service

The Pacific Society

『軍用金調達のため、ある時大和の千手院というお寺へ磯山と氏家（注＝決死隊員）が押し入り、失敗して捕縛せらるるに及び、一味の陰謀発覚して大井以下ことごとく堀川監獄に投ぜられるに至った。この時小弁も捕えられるところであったが、年少者であったためその厄を免れることができた』

逮捕寸前までいった小弁の容疑とは何であったのか。逮捕を免れたため裁判資料は乏しく、なぞの部分が多い。

ただ疑問なのは、一味はどうして生駒山麓にある千手院という小寺を襲ったかという点である。磯山と氏家はもちろん、逮捕、起訴された五十八人中に、奈良出身者は一人もいない。苦しまぎれに、手当たり次第に襲撃目標を選んだ可能性もある。

しかし、ひっかかるのは小弁と義兄芝亭実忠の経歴である。

小弁は明治十一年、奈良裁判所に転勤した父親とともに奈良に住み、土地勘は十分にある。芝亭も幼年時、奈良の寺院で修業し、小弁は大阪に来て政治講談をしていた義兄と接触していた。

この強奪未遂事件に、小弁が何らかの形で関与したと見るのは想像の域を出ないであろうか。郷土史家の吉村淑甫さんはこんな話を披露する。

『かなり前のことだが、在阪の歴史研究家から、森小弁は大阪事件でニセ札製造にかかわったかのような話を聞いたことがある』

この二つの事柄から推し測って、小弁が大阪事件に資金調達の面で関与したことも十分考えられる。

大阪事件 ③

大阪事件には後日談がある。横田武の小伝『森小弁翁』にいわく。

『小弁は年少者であったため逮捕を免れたが、しかしこれは自分が投獄されるよりも寂しい不満なことであった（略）。少年の突きつめた気持ちほど恐ろしいものはない。彼は大井以下の先輩を獄から救出することが天下国家のためであると信じ、遂に大胆不敵な行動をあえてするに至った。それは裁判所に押収されている一味の証拠書類を盗み出そうという計画だった』

『彼はその計画実行のため裁判所の給仕に雇われた。そして毎日、目的物の保管場所を探索の結果、ようやく盗み出したのであるが、義兄の芝亭実忠の知る所となり、大いにその不心得を諭されて自首し、獄につながれること月余に及んだ』

面白い話ではあるが、同小伝以外にこれを裏付ける資料を見つけることはできなかった。ともかく大阪事件の裁判は明治十九年十二月予審、二十年五月公判とスムーズに進み、小弁の企ては大勢に影響なかったようである。

出獄後、小弁は義兄、芝亭実忠が発行した民権運動の機関紙『去夢燈』を手伝った。明治新聞雑誌文庫所蔵目録によると、同誌は明治二十二年六月、大阪で創刊されている。ただ現物が残っていないので、小弁がどういう形で関与したかは分からない。

上阪後、小弁がどこに住んでいたかもなぞである。ただ、少年時代、両親と住んだ土佐堀界わいは、自由民権運動の各種集会の開かれた所だった。

昭和七年発行の郷土研究誌『上方』は、次のように主たる会場を列記する。

旅館　自由亭、西照庵、草野キミ方（以上中ノ島）、成井コウ方、福岡屋（以上土佐堀）▽料亭　洗心館、銀水桜（以上中ノ島）、新生楼（土佐堀）▽運動場　中ノ島公園

小弁はこれらの会場で開かれた政治集会、会合に顔を出していたのだろう。昭和五年、トラック諸島を訪れた五野経三という船長に、『政治運動に奔走し、大隈伯の条約改正には、大阪方面において反対の同盟会に参加し、大いに気勢をあげた』と述べている。（昭和八年刊『老船長の航海余談』）

条約改正とは、日米修好通商条約など幕末に諸外国と結んだ不平等条約を対等なものにしようというもので、明治政府の懸案事項だった。明治二十一年二月、外務大臣になった大隈重信は、国内裁判所に外人裁判官登用など不平等部分を残したまま、条約改正を急いだため、民権家らから強い反対運動が起きた。二十二年十月、大隈外相が爆弾テロに遭ったのを機に、改正交渉は中断した。

このあと、小弁は上京した。かねて志望の政治家になる修業をするため、同郷の政界の雄、大江卓の門下生になるためである。小弁二十歳の時だった。

政治家志望 ①

大江卓は弘化四年（一八四七年）幡多郡柏島（現大月町）の生まれ。明治五年神奈川県知事になり、移送中の奴隷を解放したペルー国汽船マリアローズ号事件の英断で名を高めた。

同八年には後藤象二郎の二女小苗と結婚。十年に起きた西南戦争に乗じ、立志社の林有造らと政府転覆のクーデターを企てたが失敗、十一月五日逮捕（いわゆる立志社の獄）され禁獄十年の判決を受け、岩手の監獄に収監された。

十七年、特赦で仮出獄。一時、宿毛の新田干拓など事業家としての道を歩んだ。二十年、義父でもある後藤象二郎が、反政府勢力を結集し、地租軽減、言論集会の自由、外交のばん回を要求した大同団結運動を起こすとこれに参加した。上京後は東京府下の大森、麻布、駿河台を転々としており、小弁の上京した二十二年ごろ、大江がどこにいたかは判然としない。

ともかく、大江の門下に入った小弁は、玄関番をしながら政治の勉強に励んだ。

NII-Electronic Library Service

The Pacific Society

トラック訪問のアルバムも開く坂田道太さん(左)一家。中央が三知世さん、右が幸子さん(東京・世田谷の自宅で)

小弁と大江との関係を証言する有力な人がいた。坂田道太・前法務大臣(熊本二区選出・衆院議員)一家である。

坂田さん(六六)の夫人、三知世さん(五六)は、大江卓直系のひ孫。卓の孫、恒吉さんの二女で、姉に多慈子さん(五八)、妹に幸子さん(五三)がいる。

小弁のことは父親からよく聞かされたそうである。

小弁の死後も、南洋の森家との関係はずっと続いている。文通のほか、戦後、恒吉さんの知人がトラック諸島に遺骨収集に行った際、小弁の長男、太郎さんが何かと世話をした。

昭和五十五年に三知世さんら三姉妹は、初めてトラックを訪問して森ファミリーと会い、親交を深めた。三人は、『ファミリーは千人もいるでしょう。私はだれそれの子供、なにがしのいとこなどと言って次から次にあいさつに来たけど、あんまりたくさんだから、最後はだれがどうなっているのか面食らって』と楽しそうに思い出を語り合う。

大江家略系図

- 後藤象二郎
  - 岩崎弥太郎
    - 弥之助 ＝ 早苗
      - 大江卓 ＝ 小苗
        - 太一
          - 恒吉
            - 多慈子
            - 坂田道太 ＝ 三知世
            - 幸子
  - 猛太郎

坂田道太さん自身はトラックに行ったことはないが、波乱の生活を送った大江卓には関心があり、折を見ては分厚い伝記に目を通す。こんなよしみで、政治家になりたての終戦直後、宿毛市で林譲治の応援演説をしたこともあり、『高知には親しみを感じてます』と懐かしがっている。

この連載の第一部で小弁の息子、太郎さんと二郎さんは、大正時代、東京の小、中学校に通学したと書いた。実はその際、小弁が子供たちの面倒を頼んだのが恩師、大江卓で、二人は卓の長男、太(はじめ)さん一家の世話になった。この時のエピソードが残っている。

『二人とも常夏の育ちだから、夏でも寒い寒いと震えて、どてらを着ていたそうです。新鮮なバナナしか知らないから、バナナを与えると腐っていると食べなかったようです』(三知世さん)

さて話は戻るが、大江卓の身辺がねらわれているということで、小弁は大江家をほどなく離れる。大江卓が、次に小弁を預けたのは義父で、政治的同志でもある後藤象二郎であった。

政治家志望 ②

小弁が玄関番になった東京府下高輪

NII-Electronic Library Service

The Pacific Society

の後藤象二郎邸は、豪壮な洋館であった。大町桂月著『伯爵後藤象二郎』から引く。

『—伯の高輪邸は、広さ凡そ四万坪。（略）。品川湾に面し、朝陽を俯瞰（ふかん）するを以て、暘谷（ようこく）の号もあり。伯は三年間、毎日百人の人夫を使用して、工夫に工夫し、邸内の道路を改むること前後七回、梅林の位置を換ふること三度に及び、梅林の外、竹林あり、松林あり、滝あり、池あり、牛の牧場さへもあり』

明治二十二年から逓信大臣となった後藤の権勢がしのばれる屋敷だった。続いて、

『高官来れり、学者来れり…蓬頭粗服の書生来るも敢て辞せず』

とあり、小弁も書生群の一員として入り込んだのであろう。

明治二十五年七月には、天皇、皇后両陛下が後藤邸をご訪問になり、栄華を極めた。

屋敷跡の現在の番地は品川区高輪三—一三。近代高層ビルの高輪プリンスホテル、ホテルパシフィックが建ち並ぶ一帯がそれである。

ホテルの展望台から東方を望むと、眼下に国鉄の品川駅と操車場。埋め立てた海岸にはビルが林立し、背後に東京港が窮屈そうにのぞく。

両ホテルの建物はもちろん、後藤時代のものではないが、敷地内には松のかなりの古木が植わっている。後藤は八十六年前の明治三十年死去しているから、あるいは後藤の植えたものであろうか。プリンスホテルに通じる坂道の中腹にある通称『後藤稲荷』が、わずかに確かな名残をとどめている。

小弁が玄関番になった明治二十三年前後、後藤は多忙であった。

明治二十年には、地租軽減、言論集会の自由、外交のばん回の三大目標実現のため、連絡組織として丁亥（ていがい）倶楽部を設立。翌年には東北、北陸、関東、東海地方などを遊説して回った。

反政府勢力は再び盛り返し、天皇、元老院、大臣あての建白運動が活発化し、活動家が続々と上京した。不安になった明治政府は、保安条例を発布（二十年十二月）、土佐人二百三十四人を含む五百七十人を東京外に追放、大阪に逃れた中江兆民は第一回総選挙に大阪から立候補した。

ところが、後藤は二十二年三月、政府側から誘いの手が伸びると、同志の反対を押し切って逓信大臣として入閣。この背信行為のため、後藤の言う大同団結は、『猟官のための大ぶろしきだったのか』と悪評ふんぷんたるものになった。

こうした後藤の多忙ぶりからすると、一玄関番にすぎなかった小弁が、直接後藤から政治の指南を受けた可能性は少ない。

小弁は政治の勉強をするため、東京専門学校（早稲田大学の前身）に通っていたようである。ただ、早稲田大の学籍課に問い合わせると、中退したためか、小弁が在籍した記録は残っていない。だが息子の三郎さん（七三）をはじめ子孫、親せきは、小弁が東京専門学校政治科に通学し、卒業前に退学したと直接、間接に聞いている、と口をそろえていっている。

政治家志望 ③

小弁は豪壮な後藤象二郎邸で、南洋へのあこがれを誘う物を見た。ヤシの実である。

このヤシの実は、後藤の長男、猛太郎がマーシャル群島から持ち込んだようである。

明治十七年、マーシャル群島で、日本人水夫七人が現地人に殺害された。時の外務大臣、井上馨は現地に調査団を派遣しようとしたが、南洋は野蛮な土地、というので、みんなしり込みした。

お鉢が回って来たのが、道楽の余り父親から勘当されていた猛太郎。猛太郎は柳橋の芸者、花井お梅にぞっこんほれこんでいた。『目元すずやかに鼻筋とおり、色白くなまめかず』という、すこぶるつきの美人だが、ふとした弾みで使用人を殺す。これを、義理と愛情の板ばさみで殺人を犯す悲劇のヒロインに仕立て上げたのが川口松太郎の『明治一代女』で、今でも新派十八番の出し物である。

それはともかく、猛太郎は大役を果たすと勘当が解かれると聞き、調査を引き受けた。が、不肖の息子は出航前に例の遊び癖が出たらしい。田辺尚雄（東洋音楽の研究家で昨年、文化功労者に選ばれた）著の『南洋秘話』の中で森小弁が次のようなエピソードを披露している。

『外務省から後藤氏に旅費として一千五百円を渡したところ、後藤氏はたちまち、この大金を下谷の花街で芸妓の総揚げをし、全部費消してしまった』

『お梅はこれを見て驚き、それでは男がすたるというので、自分の化粧道具一切を売り払い、まだ不足の分はひいきの客から借り、一千円を一日のうちにつくり、それを持たせて、無事に後藤氏を南洋に送ったという』

猛太郎は大任を果たし、無事帰国。勘当も解かれ、万事はうまくいった。

横浜市在住の山口洋児さん（祖父は南国市生まれの画家、故山崎勇馬）所蔵の『内外土俗品図集』には、明治十八年、猛太郎から東京人類学会に寄贈品としてヤシ縄、ヤリ、釣針などの記録が残っている。後藤邸にあったヤシの実は、猛太郎が持ち帰ったものに間違いなさそうである。

このほか、小弁の南洋志向に影響を与えたものに、明治二十三年刊、矢野文雄（龍渓）作の小説『浮城物語』が

NII-Electronic Library Service

The Pacific Society

ある。

当時、文学界に流行した南方ものの一つで、日本男子の一団が南洋に進出し、イギリス、オランダを相手にジャワ、スマトラなどを経略する、という内容である。文中、作良義文という大統領は次のようなアジ演説をする。

『日本人は自国をもって功名の地とするが、地球は何も白人の横行のために出来たものではない。日本人といえども全地球を横行する権利はある。我々いままさに全地球をじゅうりんして無人の地を席巻し日本に幾十倍の大版図を拓いて陛下に献じんとす』

この方法は、まず南洋貿易によって兵備を整え、太平洋、インド洋に乗り出し、無人島を占領し、そこを世界征服の拠点にしようというものであった。

これは空想小説である。が、欧米列強のアジア進出に、国家の将来を案じた当時の青年に大きくアピールし、横田武の小伝『森小弁翁』には、『東京専門学校在学中、浮城物語を読んで若い血を躍らせた』と、小弁の感動ぶりが書かれてある。

この小説に小弁がどれほど影響を受けたかは、その後の歩みをたどると歴然である。南洋渡航時の心境を詠んだ漢詩『述懐』では、『久シク懐ヲ遠交近攻ノ策　何処ニ向イテ　吾ガ才ヲ展ベント欲ス』と、作良大統領そのままの野望を語っている。そして南の島の経略、そのための南洋貿易という方策も、小説と酷似している。

政治家志望 ④

後藤象二郎邸での安定した生活も長くは続かなかった。小弁は自ら飛び出したのである。

この理由を、横田武『森小弁翁』は次のように説明する。

『政治家の生活を見、政治家の内面を知るに及んで、彼の純情無垢（むく）な気持ちとそれが余りにかけ離れたものであることを感じ、彼は自ら後藤邸を飛び出してしまった』

家出の時期、政治家に失望した具体的きっかけについては触れていないが、手掛かりを元に不明部分を探ってみると—

小弁が南洋貿易の会社『一屋商店』に入社したのは明治二十四年五月。家出してから生活に困りマッサージ師をしていたらしいが、この期間は長くはあるまい。家出時期は二十三年後半から二十四年三月ごろまでに範囲を狭めることができる。

この期間は、国政上特筆すべき出来事が幾つかあった。既に紹介した第一回帝国議会の開会（二十三年十一月）と、政府予算案審議過程で起こった土佐派の裏切りである。政府案に反対する野党に属する土佐派二十八人が、二十四年二月、一転して政府案に同調した背景には、大掛かりな買収工作があった。工作の一翼を担ったのは逓信大臣の後藤象二郎で、後藤邸にいた小弁は、後藤を通してスキャンダルを身近に見聞できる立場にあった。

汚い政治の実態に失望した背景には、他の要因もあったかもしれないが、この事件が大なり小なり影を落としたことは十分考えられる。もしこの事件が家出の直接のきっかけだとすると、その時期は二十四年二月ごろと推定でき、後の事実関係と一致する。

ところで、『一屋商店』の前身は、東京府会副議長、田口卯吉が二十二年、設立した『南島商会』。生活苦に陥った旧武士階級を救済する士族授産金四万四千円を充当したもので、同時に小弁の乗り込んだ帆船『天祐丸』も購入した。小弁も士族の子。『天祐丸』に乗り合わせたのも一つの運命のようでもあった。

余談になるが、小弁とかかわりのあった人物のその後を略記しておく。

義兄・芝亭実忠は明治二十一年爵位を辞したあと、頭を丸め、僧になった。小伝『芝亭龍雲』には、『夫人の仲は三十三歳で病没。数人の子女も夭折する者が多く、その哀しみもあり私事はほとんど語らなかった』と記している。

さらに生き残った子供のうち三男、英一の妻、芳さん（七六）＝浦和市在住＝は、『公家（くげ）の出だから民権運動で祭り上げられたのでしょうが、最後はとても貧乏してました』と不遇な晩年をしのぶ。

大江卓は明治二十五年の総選挙で落選。『金のいる選挙はこりごり』と政界に見切りをつけた。東京証券取引所創立に尽力したあと、晩年は出家し、中国大陸の雲南をたく鉢して歩いた。

権勢を誇った後藤象二郎は明治三十年、五十九歳で他界。豪壮な邸宅はすぐ皇族の手に渡り、子孫は昭和十六年を最後に爵位の更新申請をせず、その後の消息すら定かでない。

大阪事件の首謀者、大井憲太郎は、明治二十七年の総選挙で落選。『余が多年懐抱せる根本的革新の主義政見は、到底達する能はざるを知り』（宮崎滔天『三十三年之夢』）と政治的敗北を認めた。そのあと『意気傲然（ごうぜん）として東方経論を説き、スマトラ開拓を談ず』（同書）と、小弁と同じ南洋貿易を志したのは因縁めいた話である。

ともあれ、専制政府打倒、立憲議会主義確立の大目標に向け結集し、燃えた民権家たちは一応、目標を達成したあとは、それぞれの道を歩んだ。が、民権時代に放った光彩からすると、いずれの後半生もかつての輝きはない。

青春の夢

民権運動のある部分は、理論の未熟、運動方針の不統一に、欧米列強のアジア進出も手伝い、次第に国家主義的な

NII-Electronic Library Service

The Pacific Society

色彩を強めていった。この意味で大阪事件や大隈重信らの条約改正運動に加わり、のち日本の領土拡張に貢献しようと南洋に飛び出した小弁の青春は、民権の一つの流れを象徴しているといってよい。

民権運動が、民権と同時に一見相反する国権の確立を運動目標に掲げたのには理由があった。

だいいち、日本は明治の中期までは完全な独立国家ではなかった。幕末に欧米列強と結んだ条約に関税自主権はなく、治外法権を認める不平等な状態に置かれていた。

加えて、取り巻くアジア情勢も厳しかった。植木枝盛が、『印度はすでに英国に掠せられ、安南はすでに仏国に掠せられ、爪哇（ジャワ）はすなわち葡萄牙（ポルトガル）の掠する所となり…』と危機感を募らせたように、欧州諸国のアジア進出、支配の手は、日本の近隣まで伸びていた。民権家といえども、国家の安全と独立に無関心ではいられなかった。

国権の確立が、運動方針の一つに加わったのは自然の帰結であったとも言えよう。が、この〝確立〟がいつしか国権の〝拡張〟という帝国主義的なものに変質する。

その重要な一つの節目は、大阪事件である。引き金となった明治十七年十二月の甲申事変で、日本人が殺傷されると、政府、新聞の世論操作もあり、民権家らも『清国を倒せ』『朝鮮に謝罪させよ』と強硬姿勢をむき出しにした。緊迫したアジア情勢があったとはいえ、民権運動は明らかに民権の本質、運動の視座を失いかけた。

こうした中で、一気に台頭したのがロシア、朝鮮半島、中国北部、果ては南方にも進出しようとする〝北守南進論〟である。この拡張論の一翼を担ったのが民権家で、明治二十年代前半に流行した矢野龍渓『浮城物語』、末広鉄腸『南洋の大波瀾』といった南進小説の大半が、旧立憲改進党系、自由党系の作家によって書かれたのはその現れだった。

南方へ進出し、日本の領土を拡張しようという小弁の発想は、まさにこうした風潮の中で生まれたものである。

小弁は時代の申し子とも言える。

しかし、南進論は同時に、非常に危険な芽をはらんでいた。まかり間違えば、露骨な侵略主義に陥る。

小弁が出航した明治二十四年のちょうど半世紀後に、太平洋戦争がぼっ発した。大東亜共栄圏構想、八紘一宇が戦争遂行のお題目になった。明治の南進論が、これらの構想と直接どれだけ結びつくかは論の分かれるところだろう。が、この原形とだけは言えそうである。小弁も、こうした危険な思想を抱えて南洋に渡ろうとしていた。だが、これをもって小弁に侵略者、膨張主義者のレッテルを張ることができるだろうか。

まず第一に、彼は武装集団を率いて組織的、計画的に遠征したのではない。同行したのは自分が勤めていた貿易会社の同僚社員一人で、所持していたのは日本刀一振りと短銃一丁だけである。領土拡張に貢献したいとの気持ちは、まだ完全な独立を獲得していない祖国のため、何かしなければという若者らしい夢と使命感—と言えはしないか。

案外、本音は南洋を支配し、そこの王様になりたいという冒険心だったかもしれないが、ともかく小弁は日本を後にした。

森小弁関係年表

明治	小弁と家族らの歩み	国内、土佐の出来事
元		明治維新
2	小弁土佐郡北新町生まれる	藩籍奉還
3		
4	父可造大阪府大属。一家大阪へ	
5	可造大阪裁判所解部	司法職務定制制定
6		後藤、板垣征韓論に敗れ下野。愛国公党結成
7		
8	小弁大阪の小学校入学	立志社創立
9		
10		西南戦争。大江ら立志社の獄
11	可造奈良裁判所長	
12		
13	可造死去　一家土佐へ帰郷	国会開設の詔勅　自由党結成
14		
15	小弁海南学校通学	後藤、板垣洋行（翌年帰国）
16	小弁兄正教を頼り再上阪	自由党解党。秩父、加波山など激化事件
17	義兄芝亭実忠政治講談で大阪へ	朝鮮で甲申事変。土佐などで義勇兵募集
18	小弁大阪事件に連座	
19		
20		後藤大同団結運動始める
21	大隈の条約改正に反対 芝亭『去夢燈』発行	大隈の条約改正交渉始まる
22	小弁上京。大江卓、後藤象二郎の玄関番に	大日本帝国憲法発布。後藤入閣 大江、中江兆民ら七人第一回総選挙に当選。『浮城物語』刊
23	東京専門学校に通学（？）	
24	上屋商店入社。南洋へ出航	第一回帝国議会開かれる

NII-Electronic Library Service